

閲覧ニュース

35号

1982.7

前期試験に備えて

1) 開館時間の変更について

7月3日、7月10日の両土曜日は3時まで開館します。

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限り、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

投書箱から

『ニュートン』の購入希望について

上記の雑誌は6月1日の図書館運営委員会で購入が決定しました。7月号から受入予定です。

閲覧証未受取の方へ

閲覧証を未だ受け取っていない方は早急に図書館カウンターに受取りに来て下さい。夏休みを過ぎても取りに来ない場合は、処分することがあります。閲覧証がないと、学部に進学してからも図書の貸出は受けられません。

夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の閉館、貸出等については下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 7月16日(金)～9月17日(金)

貸出冊数 1人5冊まで

(但し雑誌は対象外です)

2) 開館時間

7月19日(月)～7月31日(土)

平日 9時から5時まで

土曜日 9時から1時まで

8月

平日 9時から3時まで

土曜日 9時から1時まで

9月1日(水)～9月11日(土)

平日 9時から5時まで

土曜日 9時から1時まで

3) 閉館

8月9日(月)～8月14日(土)

かえす事が

出来なくなった一冊の本

桂 芳 久

他人から借りた本を、時として、かえさない場合があるものである。けっして悪意や怠惰のせいではないのだが、つい、借りたままになっている本がある。申しわけないことであり、許されない行為ではあるが……。

これから書くことは、そうした一冊の文庫本についてであるが、親切に私にしてくれた相手が、もうこの世にいない。いや、ある日突然、いのちを絶たれたかたであるからだ。

その人とは、三島由紀夫である。私がまだ敗戦の傷ついた影の深かった昭和二十五年の初秋に、新進作家の三島由紀夫に紹介する人があった。若き劇作家、加藤道夫で、竹取物語を素材にした『なよたけ』という作品を戦中の昭和十八年に書き、二十五歳の文学部大学院研究生であったが、ニューギニア戦線へ召集されて征った人であった。この加藤道夫が日吉での教養課程で英語を私たちのクラスで教えていた。まだ三十歳になるかならないかの年齢であった。ニューギニアでの戦闘は最も苛酷な戦場となった。加藤道夫はその地で地獄を見たはずである。しかし、彼はそのことは一言も語らなかった。フランスの劇作家ジロドューと折口信夫の影響を受け、「文学座」に同級生、芥川龍之介の長男、比呂志と共に新しい新劇運動を起しつつあった。

加藤道夫の戯曲は幻想的で、リリシズムがみなぎっていた。私を三島由紀夫に紹介した加藤道夫は、昭和二十八年十二月二十二日の夜、世田谷区若林の自宅の書斎で自から命を

絶った。学生であった私へ紹介状を書いてくれて、わずか三年後である。三十五歳の若さであったが、彼がまいた一粒の種は、若き教え子たちによって育てられ、いま「劇団四季」に成長している。

昭和二十五年といえ、その年の六月二十五日に朝鮮半島三十八度線で戦火があがり、激烈な朝鮮戦争がはじまった年である。ふたたび戦争の暗い影が生き残った日本人の心に投げかけられたのである。

三島由紀夫は大正十四年（一九二五）一月生まれであるから、年齢は昭和の年数と同じことになる。したがって、昭和二十五年は二十五歳で、書下ろし長編小説の第二作『愛の渇き』を出版していた。しかもこの長編小説は、朝鮮戦争がはじまった六月下旬、まさに直後に上梓されたのである。

目黒区緑ヶ丘二二三が自宅であり、東横線で当時の都立高校駅から丘の方へ歩いて行くところにあった。

私は学部の卒業論文を書くときがやってきた。それで三島由紀夫に相談すると、すぐに「藤原定家をやり給え」といった。新古今和歌集の選者で御子左家・俊成の子息であることはいまでもない。最近、京都、冷泉家から定家の日記『明月記』など重要文献が多量に発見されてニュースになったのは承知のとおりである。

藤原定家の研究といっても、当時はまだ一級文献が学生の手にはいるはずがない。中国戦線で戦死する冷泉為臣による『藤原定家全歌集』は昭和十五年に出版され、三田の図書館にあった。

三島由紀夫が書斎から一冊の岩波文庫を手にして来て、

「定家の歌論がいいと思う」といった。



三島由紀夫

一冊の文庫は、久松潜一編『中世歌論集』である。この文庫は中世に多く書かれた歌論のなかで、俊成、定家、為家、正徹、それに後鳥羽院などの十一篇を精選したものである。

昭和十五年十月三十日第六刷発行 定価六十銭、とある。

藤原定家の主要な歌論、「近代秀歌」「毎月抄」「詠歌大概」が収められている。手にして私が驚いたのは、その殆んどの文章のわきに訳・註が小さな文字で几帳面に万年筆で書込んであることであった。

昭和十五年といえばペンネーム三島由紀夫ではなく、本名、平岡公威が学習院中等科の三年生のときはずである。

多分、やがて三島由紀夫というペンネームを与えた、中等科からの恩師の国文学者清水文雄の講読をうけたのにちがいない。

中世の歌論を十五歳の中学三年生で受講していることは、いかに学才に秀でていたかを証しだててだろう。

例えば『後鳥羽院御口傳』の書き出し。

大和歌を詠ずるならひ、昔より今にいたるまで、人のいさめにもしたがはず、みづからたのしむにもよらず、唯天性を得たるをもて、をのづから風情の妙成をめぐらす。

「いさめ」の横に片仮名で、ヲシヘニヨルモノデモナク と書いてある。

私はいまでも三島由紀夫の文学の本質はここにあると思っている。

この文学観は、江戸時代の国学者本居宣長の「あしわけをぶね」に通じる。

歌ノ本體、政治ヲタスクルメニモアラズ、身ヲオサムル為ニモアラズ、タゞ心ニ思フ事ヲイフヨリ外ナシ

文学を政治の手段や善悪教誡のために書くものではない、と強く主張する。

そして、岩波文庫を渡ししながら笑い声でいった。

「この中の正徹物語にはね、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰をかうぶるべきことなり、と書いてあるよ。桂君、定家を卒業論文にしても、決して非難したらいけないよ。罰をうけるというからね」

いま私の机の上に、あの『中世歌論集』が古びた色をして在る。

私は遂にこの本をかえす人を突然に失ったのだ。昭和四十五年十一月二十五日正午過ぎに。

この一冊の文庫を、私は最も大切な贈り物だったのだ、~~も~~思っている。いまでも遺品だとは考えたくないのである。

(文学)

編 集 後 記

今回35号は、文学の桂先生から「かえす事が出来なくなった一冊の本」と題して三島由紀夫にまつわるお話をお書き頂きました。文中、多くの図書をあげておられますが、そのうち図書館所蔵の代表的なものを記しておきます。まもなく夏期休暇の長期貸出も始まりますので、参考になさって下さい。

藤原定家に関して

日本歴史学会

人物叢書 95 藤原定家 村上修一著

吉川弘文館 1962

280.8/N71/95

文学(鎌倉・室町時代) 1

藤原定家 谷鼎著

910/B89k/1

日本詩人選 11 ; 藤原定家 安東次男著

筑摩書房 1977

911.08/N71/11

安田章生

西行と定家 日本抒情詩の源流

講談社 1975(講談社現代新書384)

藤原定家

明月記 第1~3

国書刊行会 1973

915.4/F56/1~3

日本古典文学大系 28

新古今和歌集 久松潜一等校注

岩波書店 1958

918/N71/28

日本古典文学大系 65

歌論集 能楽論集 久松潜一 西尾実校注

岩波書店 1961

918/N71/65

三島由紀夫に関して

パトグラフィ双書 7 ; 三島由紀夫 — 芸術

と病理 — 梶谷哲夫著

金剛出版 1971

908/P27/7

野口武彦

三島由紀夫の世界

講談社 1971

910.268/Mi53

平岡 梓

伴・三島由紀夫

文芸春秋社 1972

910.268/Mi53

佐伯彰一

評伝 三島由紀夫

新潮社 1978

910.268/Mi53

文芸読本 三島由紀夫

埴谷雄高等著 第2版

河出書房 1975

910.268/Mi53c

三島由紀夫全集

新潮社 1973~1977

918.68/Mi53/1~35, Sup

折口信夫に関して

文芸読本 折口信夫

室生犀星等著

河出書房 1976

910.268/O71

折口信夫全集

中央公論社 1965~1968

918.68/O71/1~31, Sup.

閱 覧 ニ ュ ー ス 3 5 号

1 9 8 2 . 7 発 行

北里大学教養図書館

発 行 責 任 者 小 野 健 一

〒 2 2 8 相模原市北里 1-15-1